

をば引出て贈り給はる故引出物といふは馬にかざりたる事なり、それを本として、轉じてなにも引出物といふよし、これもことはりなきにはあらず、いはれたり、去りながら、かたくとりて、さとのみもいふべからず、物に引といふことつけていふ、つねのことなり、引わたす、引やる、引ちがふる、引かづくなどいへる、その外にも、俗にも、膳の引もの、または引落などいふの類ひ多く有り、さらばそこへ引並べ、引居、引渡などいふ詞より出て、あながち馬引よりおこれるにはあらず、かゝるさまの事いと多し、ふた、び思ひかへして、得心すべきにこそ、略しては引物とのみもいひ、なにくゝを引ともいふなり、

〔倭訓栞都前編十六〕つと。○中 苞苴をいふは裏むの義なるべし、よて万葉集に裏字をつと、よめ

り、又つ、みもてゆかん、見ぬ人のため、ともあれば、みも反も、つも反と也、山づと、濱づと、道ゆきづと、お中づとなどは、その土産をいひ、手向のつと、家づと、都のつとなどは、其土産をもて、こんずる所をいへば、共に通へり、

〔伊勢物語〕むかし男みちの國に、すゞろに行いたりにけり、そこなる女、京の人は、めづらかにやおぼえけん、せちに思へる心なん有ける、○中 おとこ京へなんまかるとて、

くりはらのあねはの松の人ならば都のつとに、いざといわまし、といへりければ、よろこぼひて、思ひけらしとぞ云をりける、

〔大内問答〕一御酒半に引出物被進時は、何様の物たるべき哉の事、

作法

御酒半に引出物の事、殿中にては一獻申沙汰よりも、獻々にも進上候、またこんはさめにも進上候、又一兩度も進上候、常に御參會の時は、客人、貴人にて候へば、從亭主被進、又亭主、貴人ニ而候へば、從客人も被進候、然ば五獻七獻目などに、御酌ニ而御酒被參候時、二目を被參時、可然候、一番には必太刀たるべく候か、馬、太刀なども可然候、加様の時は、目錄添候はで、太刀を被進時、馬をと詞